小郡市立三国中学校だより

一心一意

令和7年3月11日
第21号
校長　山本　拓

「第31回卒業証書授与式」～255 名の卒業生が大海原へ～

3月8日(土)に第31回卒業証書授与式を行いました。卒業生255名は、清々しい表情で河口から大海原へと旅立っていきました。卒業生の合唱のゴールである式歌「河口」は体育館中に響き渡り、3年間の思いが込められ、「凄い！」の一言でした。最後の校歌も大きく響き渡り、終了後保護者、来賓の方々から感動の拍手をいただきました。校歌終了後に拍手をいただくのは、初めてのことでした。 卒業生代表の徳毛海翔さんの答辞の一部を紹介します。

答辞

厳しかった冬も終わりを告げ、太陽の光やそよ風の暖かさには、春の気配を感じられる季節となりました。私たち２５５名は、今日、この三国中学校を卒業します。

思い起こせば三年前。私たちはこの三国中学校に入学しました。慣れない校舎や新しいクラスメイト、先生に不安を抱きながらもこの先の中学校生活に大きな期待を抱いていたことを今でも鮮明に覚えています。

中略

こうして思い返してみると、三国中学校の三年間は、長いようで短い三年間でした。私は生徒会長として中学校生活を送ってきましたが、自分の保護者、先生、そして友たちに本当に支えられたと感じています。生徒会長はつらくてきついこともありました。「自分が学校を変えなければならない。」「みんなの期待に応えなければならない。」と常に「自分が自分が！」と言い聞かせて過ごしてきました。また、自分が全校生徒のみんなに厳しいことを言ったら「嫌われるのでは？」と思うこともありました。しかし、そんなときに寄り添ってくれたのが、先生、保護者、友だちでした。みんなには、いつも相談に乗ってもらいました。特に友たちは、昼休みや休み時間にささいな話しで笑い合った日。部活動で暑い夏、寒い冬に共に汗を流した日。共に悔しがり、共に励まし合った日。と、いつも隣には友たちがいました。そのとき、初めて自分は一人ではないと実感できました。その経験があるからこそ、私は中学校生活を楽しく過ごせたのだと断言できます。

先生方には、勉強、部活動、社会のこと、人間として大切なことをたくさん学ばせてもらいました。いつも、私たちのことを第一に考えてくださり、ときには厳しいこともご指摘いただきました。しかし、そのお陰で今の自分たちがあるのだと思います。先生方から学んだことを胸に刻んで自分だけの道を貫いていきます。

そして、毎日見守ってくれた保護者の皆様。いつもは、恥ずかしくて言えないけれど、今日こうして卒業を迎えると、感謝の気持ちがこみ上げてきます。毎日「いってらっしゃい」と言ってくれる存在に救われていました。また、どうしようもない苛立ちや心の痛みにそっと手をさしのべてくれました。これからもたくましく、更に成長していく私たちの姿をずっと見守ってください。

数え切れないほど、沢山のことを経験した三年間。笑いが絶えなかった教室も、汗を流したグランドも、そして、何気なく過ごしてきた中学校生活も今日で終わりです。この先、私たちは、それぞれ新しい道を進んでいきます。これまでの中学校生活で培ってきた経験を生かし、「自分ならできる！」そう言い聞かせ、希望に満ちた輝かしい未来に向かって走り続けます。

最後になりますが、三国中学校の更なる発展と皆様のご活躍をお祈り申し上げて、答辞といたします。

令和七年三月八日　卒業生代表　徳毛海翔

「第31回卒業証書授与式」 ～校長式辞～

前略

　三年前、私がこの三国中学校に赴任した年に皆さんが入学してきました。小学校四年生の時に、突然休校となり、制限のある小学校生活は、中学校入学後もしばらく続きましたが、新しい生活への大きな期待を胸に生き生きと中学校生活をスタートさせました。

　一年生の時は、次第に入学時からの緊張感が薄れ、大きな失敗をしてしまい、先生方に厳しく叱られる場面が多かったと思います。特に、人の心を深く傷つけることについては、自分がその場にいなくても同じクラスの一員として、傷ついた人に心から寄り添い、自分ごととして考え、二度と繰り返さないようにみんなで行動していくことの重要性に気づきました。

　二年生の修学旅行では、立候補した人たちで結成された実行委員を中心に夏休みから準備を進めました。京都二日目の班別自主研修では、急なアクシデントにも班で最適な方法を考え、話し合い、行動に移すなど冷静に対応することができました。また、学校行事は、特別なものではなく、学校生活の一部であり、大切なのは皆で過ごす日常の生活であるということに気づくことができました。

　三年生になり、体育大会では、自分たちで考え、すばらしいものを創り上げました。スローガン「Try 向日葵のような笑顔」のもと皆さんが、スローガンどおりの向日葵のような笑顔で競技に仲間とともに挑む姿を見て心からうれしく思いました。体育大会はあたりまえにできるものではなく、地域の方や保護者の皆様など多くの支えや理解があってはじめてできるものだから、協力して笑顔で競技する姿で感謝を伝えなければならない。ということを後輩たちに教えてくれました。

　部活動では、文化部も体育部も卒業していった先輩たちや共に練習してきた後輩たちの想いを背負い、それぞれの部が記憶に残る試合や演奏、作品をみせてくれました。バレーボール部の試合の中で、ゲームの流れが相手チームにあるかなという場面がありました。少しずつ点差が開き、観ていた私も正直「これまでかな」と思っていました。しかし、仲間がミスしたり、相手の攻撃が成功したりして、きつい状態になってもキャプテンは「大丈夫大丈夫、絶対勝てる」と笑顔で仲間をずっと励まし続け、仲間たちもこれに応えていました。きついときに頑張れというのは簡単ですが、仲間を笑顔で励ますことは大人でも難しいことです。私は、この姿に、強い信頼というものを教えてもらいました。

　文化発表会では、時間がない中でも完成を目指して、それぞれの学級が仲間と強く絆を深め、大きい声よりも響く声を意識して、聴く人が感動する合唱を響かせました。合唱は、仲間づくりそのもので、強い信頼で結ばれているから人の心に伝える演奏ができるんだということを全校に示してくれました。今日のこの式での合唱が、みなさんの合唱のゴールとなります。耳だけでなく心で聴かせてもらいます。

　歌手のミセスグリーンアップルの楽曲である「僕のこと」は、青春時代の葛藤を歌った曲です。歌詞の中に、「僕と君とでは何が違う？」と問いかけ、「僕は何かに怯えている。」とあります。皆さんの中にも、3年間の中で、周りの人と比べてしまい、時には劣等感を感じて、不安に思いながら過ごした人がいたのではないでしょうか。周りの人がうまくいっているのを見るたびに自分の努力は無駄だと感じ、自信を失った人がいたかもしれません。また、歌詞の中にある「伝わることのない思いもある。だからぼくは時々寂しくなる。」とあるように、友だちと過ごす日常で感情の行き違いで喧嘩したり、傷ついたりしながら、悩み、葛藤し、自分で自分の心に折り合いをつけてきたのではないでしょうか。中学校3年間すべてが、順風満帆だった人は一人もいないはずです。

　そして、この曲の後半に「今日まで歩いてきた日々を人は呼ぶ、それがね軌跡だと」という歌詞があります。皆さんはこれから様々なことに目標達成を目指していくと思いますが、大切なのは、そこに至るまでの過程であり、一日一日の積み重ねがかけがえのない人生を創り出すということ。自分の歩んできた道のりは自分だけの歴史となり、他の人と比較したり評価されたりするものではなく、絶対的な価値を持つ自分だけのものになるということを忘れないでください。

　最後に皆さんに2023年にワールドベースボールクラッシックの日本チーム監督として優勝に導いた栗山ひできさんが書かれた新聞の社説の一部を紹介します。「人生で最も不安に感じるのは、進むべき道が見えない時です。悩まなくていい。大切なのは不安な自分をきらいにならず、自分を信じること。才能がないんじゃなくて、まだ才能の出し方が分かってないだけ。どう行動するかは自分の頭で考える。周囲と比べず、自分の中で比較し、成長したかどうかを考えましょう。ただ、人は一人では生きられない。笑顔であいさつし、みんなと仲良く。だれかを喜ばせ、役立つことを心がけよう。人生は捨てたものではありません。ぼくは皆さんの人生を応援しています。」

省略

　それでは、卒業生の皆さん。お別れの時です。三年間ありがとう。これから皆さん一人一人の人生が輝かしいものであることを祈りつつ、式辞とします。

　令和七年三月八日　小郡市立三国中学校長　山本　　拓